(5) Kretschmer, E.: Korperbau und Charakter. Untersuchungen zum Konstitutionsproblem und zur Lehre von den Temperamenten. Springer Verlag, Berlin, 1955
(相場　均訳　体格と性格　体質の問題および気質の学説によせる研究　文光堂　一九八一)
(6) Kretschmer, E.（内村祐之訳）天才の心理学　岩波書店　一九八二
(7) Van Krevelen, D. A.: Early infantile autism and autistic psychopathy. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia 1: 82–86, 1971
(8) Stevens, A., Price, J.: Evolutionary Psychiatry.: A newbeginning (Second Edition). Routledge, London, 133–140, 2000
(9) Wing L.: Asperger's syndrome: A Clinical account. Psychological Medicine, 11: 115–129, 1981
(10) Wing L.: The Autistic Spectrum. A Guide for Parents and professionals. Constable and Company, London, 1996
(久保紘章、佐々木正美、清水康夫監訳　自閉症スペクトル　親と専門家のためのガイドブック　東京書籍　一九九八)
(11) Wolff, S., Barlow, A.: Schizoid personality in Childhood: A Comparative Study of Schizoid, Autistic and Normal Children. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 20: 29–46, 1979

〔おかじま・よしろう　自治医科大学精神医学教室講師〕
〔かとう・さとし　自治医科大学精神医学教室教授〕

現代のエスプリ 464号.
2006年3月.
「アスペルガー症候群と強迫症」

■繋がる

アスペルガー症候群と妄想形成

小林隆児

はじめに

広汎性発達障碍（PDD）と妄想形成について十年余り前、筆者は論じたことがある（小林　一九九一[1]、小林　一九九四[2]、小林　一九九五[3]）。対象となった患者は今で言うところの高機能自閉症（HFA）あるいはアスペルガー症候群（AS）であった。ここでは字幅の関係で当時論じたPDDにおける妄想形成のメカニズムについて、発達論的視点から当時の論考をさらに深めることで、本特集で筆者に与えられた役割を果たしたい。

なお、筆者はHFAとASを厳密に区別しない立場を取っている。本論でも厳密に両者を区別しないで論じていることを最初に断っておきたい。

過去の事例から

はじめに読者の参考のために、以前筆者が発表した妄想形成に関する事例のひとつ（小林　一九九五[3]）の概略を紹介することから始めよう。

明子（仮名）　初診時二十五歳　（高機能）自閉症

〈症例の概要〉

幼児期より自閉症としては知的発達も比較的良好で、家族の期待もあって高校入学までは順調な発達を遂げているようにみえた。高校三年の時、父親の病死を経験したが、どうにか卒業後就職することもできた。しかし、まもなく職場で適応困難となり、対人的トラブルが続出していった。ついに出勤さえ困難となり、一年余りで解雇された。社会適応の改善を目指して精神保健センター（当時）のデイケアにも通ったが、そこでも引きこもり傾向が顕著となり、家庭でも母親への暴力行為も出現したために、筆者のもとに受診となった。

初診当時、周囲に対する警戒心が強く、視線を強く回避していた。特に目に付いたのが、周囲の人たちはきれいで、自分だけ醜いという確信的な思いに囚われていることであった。自分の容姿への囚われが妄想化していると判断された。彼女の容姿に対する囚われは、強い強迫性を背景に有していた。

妄想発現の直接の契機は、第二次性徴発来が友人より遅れたことにあったが、容姿コンプレックスが増大した要因として、幼児期からの容姿への強い関心と、高校で障碍児のための特別編成学級に入れられたことによるプライドの傷つきなどが関与していた。さらに家族背景に、自我理想の高い母親自身も思春期に摂食障害を呈し、性同一性の獲得をめぐる葛藤を有していたことがその後の面接で明らかになった。

治療は母親自身が娘のハンディキャップをどう受容し立ち直っていくかという喪の作業に対する心理的援助を中心に展開された。当初は母子間の強い緊張が高じて明子は母に激しい攻撃的行動を示したが、まもなく母自身の過去への内省が契機となって、明子も自らの心理的外傷体験を言語化するようになり、母子とも社会的引きこもり状態から次第に脱皮していった。

明子は「まなざし」に対する恐怖のために視線を回避し続けていたが、恐怖の対象は薬品に描かれた人物像やまな板に刻印された魚のマークの「まなざし」にまで及ぶなど、病者にとって自らの環境世界は圧倒的な力でもって相貌性を帯びて迫り来るものであった。このように対象が相貌的に知覚された直接的契機は第二次性徴発来にまつわる心理的外傷体験であったが、その基盤には自閉症特有な知覚様

態である相貌的知覚（原初的知覚様態）が活発に働いていることが示唆されたのである。

明子の妄想的思考内容は、思春期女性の第二次性徴発来を契機とした容姿に対する強い劣等意識に端を発しているが、それを訂正困難なまでに強固なものとした要因として、対象刺激がことごとく迫害的な色彩を帯びて彼女に迫るという原初的知覚様態が大きく関与していた。そして母親面接を通して母親が明子のこれまでの不安な気持ちに共感できる心的状態に至って初めて、明子の強い不安は和らぎ、それとともに迫害的な妄想は次第に影を潜めていったのである。

妄想はその思考内容の非現実性と訂正不能のふたつの条件によって定義される思考障碍である。その点ではこの事例の思考内容そのものも妄想と呼ぶことに問題はなかろう。ただ、筆者はここでＨＦＡ／ＡＳと妄想形成の関連性について、発達論的視点に立ってさらに検討を試みてみよう。そのことによってＨＦＡ／ＡＳになぜ妄想（の如き思考の特徴）が生じるのか、多少なりともその糸口が見えてくるかもしれない。

妄想における非現実性

ＨＦＡ／ＡＳの思考内容が非現実的であったり、理解困難であったり、論理が飛躍していたりすることは珍しいことではない。そのことが診断の大きな根拠となっているほどである。思考内容が現実的であるということは、間主観性の成立が保証されていて初めて可能になるのであって、自閉症には基本的障碍といってもよい間主観性の問題が基盤に存在することを考えると、彼らの語る思考の内容がたとえ一見了解可能なものに思えたとしても、それが現実的なものであると容易に結論づけることはできないかもしれない。つまりは、彼らの語ることばとわれわれの語ることばが間主観性の成立によって保証された同じ意味内容を孕んでいるか否かの問題である（小林　二〇〇三）[4]。われわれの論理的世界を通して彼らの語る思考内容の論理性や現実性の是非を論じたとしても、さほど建設的な示唆は得られないのではないか。われわれの論理的世界とは異なった視点を持つことが必要ではないかと思われるのである。

原初的知覚様態と知覚変容体験

常々筆者が主張しているように（小林　二〇〇四）[5]、自閉症に特に際立って顕著に認められる原初的知覚様態の働きが、彼らの体験そのものを（一見すると）非常に特異的なものにしていることを考えなくてはならない。知覚体験そのものからしてわれわれのそれとはかなり趣を異にしている可能性が強い。それは多様な対象刺激を生々しい感覚世界で捉えやすいこと、あるいは生き物でもない対象でさえまるで生き物であるかのように生々しく捉えやすいことである。このようにあらゆる対象を相貌的に捉えやすいということは、彼らには時として外界は生き生きとした実に快適なものに映ることもあるが、多くの場合はそうではなく、彼らにとって侵入的で迫害的な色彩を帯びたものに映っているのが現実であろう。

原初的知覚様態とは、当事者の情動のありよう（安心か否か）によって知覚そのものが大きく変容するという特徴をもつ。通常、知覚現象は客観的なものであると思われがちであるが、この原初的知覚様態が非常に優位な状態にあると、彼らの知覚体験は彼らの心的状態によって大きく変容してしまう。そのような変容体験はさらに彼らの心的状態を動揺させ、さらなる変容を引き起こす。こうして悪循環が肥大化していくことになる。ここでの彼らの主観的体験世界を筆者は以前「知覚変容現象」として描出した（小林　一九九三）[1]。恐らく明子の主観的体験世界もこのような様相を呈していたと思われるのである。

原初的知覚様態と体験様式

彼らの体験はいつまでたってもその生々しさが失われがたいということは、強い情動不安とともに体験されているゆえで、その結果彼らの体験はトラウマ化しやすい。time-slip 現象はそのことを端的に示している（杉山　一九九九）[10]。体験に対して適度な心理的距離を保つことが困難だということである。

われわれの知覚体験は、五感に代表されるような分化した知覚機能に裏付けられながら、その都度間主観性によって裏打ちされたことばによって意味づけられ、体験記憶として蓄積されていく。しかし、彼らにはわれわれと同じようなことばによる体験の意味づけが容易ではない。しかし、彼らなりに自らの体験は何らかの言動とともに記憶され、想起されている。問題はわれわれにはそれがどのように行われているのか容易に理解しがたいところにある。

その問題を理解する鍵を握っているのが、先に述べた原初的知覚様態である。原初的知覚様態とは知覚の原初的形態つまりは未分化で本能的、自動的水準の知覚様態を指す。日々の体験がわれわれのようには分節化（ことばによって体験を切り分けること）されず、未分節な様相でもって記憶されている。その中で強く記憶を焼き付けているのが情動の働きである。濃厚な情動的色彩によって、体験はその時知覚された何らかの言動（自分あるいは他者の発したことばや行動）とともに記憶される。その後、同質の情動の動き（情動興奮）が引き金となって、ともに記憶された言動がその表現型として発動する。遅延性反響言語や隠喩的言語表現として取り上げられてきた自閉症の言語発達病理現象は恐らくそのような現象を意味していると考えられるのである（小林　二〇〇四）[5]。

わかりやすい例をひとつ取り上げてみることにしよう（小林　二〇〇四）[6]。

I男　初診時三歳四ヵ月　軽度精神遅滞水準の自閉症

三歳少し前に、自閉的傾向を指摘されている。数字へのこだわりが強く、知覚過敏も強い。何かに興味が惹かれると、直線的に走っていき、手で扱おうとする。衝動性が高い。

MIUでの関係支援を実施した事例であるが、母親はI男の一見独特なことばの使い方に戸惑うことも少なくなかった。しかし、I男の発語の意図を感じ取ることによって、母親は彼のことばのもつ意味を徐々に把握できるようになった頃（I男五歳六ヶ月）のエピソードである。

朝の外出時、母親がI男に靴を履かせようとすると、〈Pノクツ（Pの模様が入っている靴）ビショビショ〉と言って泣きそうになっている。I男の様子からは、どうもその靴を履きたくないらしいことはすぐに察しがついたが、昨日雨が降ったわけではないので、その靴は濡れていなかった。彼は母親が履かせようとした靴ではなく、以前履いていたお気に入りの靴を履きたかったようであった。そのことが分かった後すぐに母親は次のようなことを思い出した。ある日、雨が降って自分の気に入った靴が濡れて履けなくなってしまったことがあった。その時、母親は何度も「靴はびしょびしょで履けないね」と説明してやった。

Ｉ男はそのことを記憶していたのであろう。〈ビショビショ〉と言えばその靴を履かないですむと考えたのではないかと母親は思ったという。

Ｉ男のことばと原初的知覚体験様式

Ｉ男のエピソードでは、お気に入りの靴を履きたくても雨に濡れたために履けなかったという過去の不快な（嫌な）体験が記憶され、その後再び同じような不快な場面に遭遇したことによって、過去の体験が想起されていることがわかる。ここで過去の記憶を想起させたのは、お気に入りの靴を履きたいのに履けないという不快な情動を中心とした体験であることが推測されるが、彼にとってその時の体験は、雨が降った、靴が濡れた、その靴が履けない、だから悲しいなどと分節化されて記憶されていたのではなく、その時の体験は情動体験を中心に、文脈全体が未分節な形で記憶されていたのであろう。その情動体験とともにもっとも印象深く（強烈に焼き付いて）記憶されたのが母親の語ったことば〈……ビショビショ……〉であったのである。

このように考えていくと、彼の発した〈ビショビショ〉ということばの背景には、ある日のお気に入りの靴が雨に濡れて履けなくて嫌だったという体験全体が生き生きと想起されていることが想像される。すなわち、このような体験全体は「地」として背景に流れながら、〈ビショビショ〉ということばが彼には印象深く記憶され想起されたことによって、このことばは図として機能しているということができる。ここにみられる記憶は、単に情動、運動、知覚、各々のいずれの心的過程が切り分けられた形ではなく、生々しく未分節な形で記憶されているが、その際に記憶想起の引き金となっているのは、不快な（嫌な）情動であると考えられるのである。

原初的知覚体験様式と文脈依存性

このように彼らの体験様式とことばとの連関は、文脈に強く規定されている。人間個々の体験は本質的に唯一無二で私的体験版といえるにもかかわらず、われわれは体験をことばによって意味づけることが可能であるがために、体験が容易に共通体験版となる。このことは見方を変えれば、個々の固有の体験がことばによって容易に風化してしまうという危険性を常に内包しているということである。

その意味からすれば、彼らの体験様式とその意味づける過程の特徴をみていくと、彼ら特有の意味づけは体験の唯一無二性を独特な表現型によって保っていると見なすことも

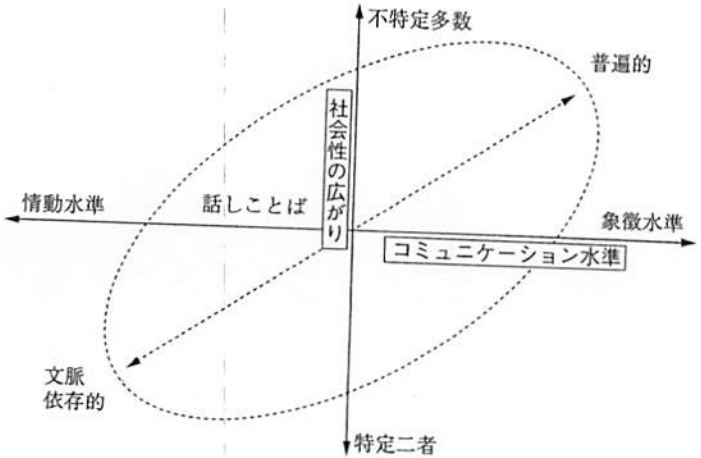

図１　社会性の広がりとコミュニケーション水準（小林，2004，33頁）

可能である（小林　二〇〇四）[7]。それは彼らの体験世界の真の意味を理解するうえで不可欠なことであるといってもよい。

彼らの体験の意味づける過程は、彼らの体験総体、あるいは彼らの具体的な生活世界を通して初めて理解可能になるという際立った特徴をもつ。われわれのようにことばが共同主観に裏打ちされた意味内容ではなく、彼ら独特の意味内容を孕んだ形で用いられている。つまりは彼らの体験の意味づけ方は極めて文脈依存的であるということである（図１）（小林　二〇〇四）[6]。

ここで筆者が強調したいのは、彼らの体験様式がわれわれのそれと本質的に異なるのではなく、体験そのものをいかに意味づけるか、その思考過程がわれわれのそれと大きく異なっているということである。しかし、その思考過程はけっして異常現象として安易に片づけられるものではなく、発達論的にみると、必然的な営みではないかと思われるからである。

被害的色彩の濃厚な妄想内容

彼らの対人的態度には強い被害的な構えが強いが、それは彼らの極度な安心感のなさからきている。そのため彼ら

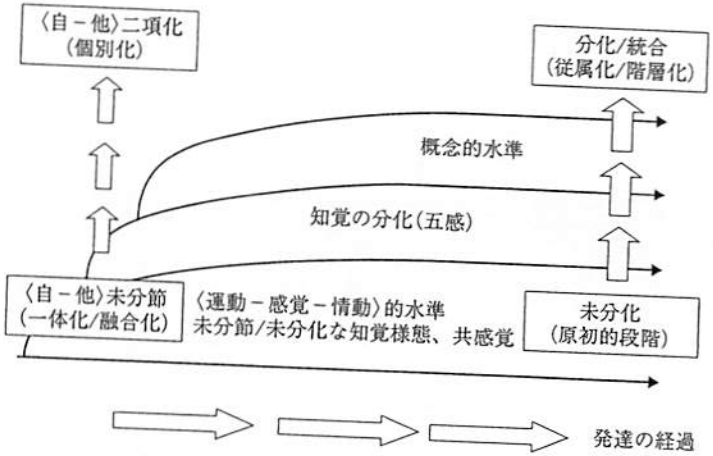

図2　原初的知覚様態と発達の経過（小林・鯨岡，2005，56頁）

の妄想内容には被害的色彩が濃厚に反映しやすい。自分の周りの人々みんなきれいだ自分だけ醜いと頑強に主張した明子の思考内容は、頼るすべのない強い不安に圧倒されていた明子には周囲の他者すべてが自分を圧倒するように映っていたであろうことを考えると、至極当然のように思われるのである。

妄想と訂正不能

彼らが抱いている思考内容を容易に訂正したり、捨てたりすることができないのには、恐らくそれなりの理由があるのではなかろうか。極度に不安な状態に置かれている彼らが彼らなりの安定を求めようとする営みが強迫的なこだわりにある（小林　二〇〇五）[8]ことを考えれば、彼らの一見非現実にみえる思考内容も、彼らなりに意味づけ安定を図ろうとする試みとみなすことができると思われるからである。よって、彼らの一見理解困難な思考内容をわれわれの論理でもって否定したり反論したりして、彼らを追いつめることがいかに反治療的行為であるかがわかるであろう。

おわりに

以上、HFA／ASにみられる妄想の特徴である非現実性と訂正不能性について、発達論的視点から再考を試みた。筆者が最後に強調したいのは、彼らに対する治療の基本

はあくまでも発達論的視点に立って行われる必要があるということである。私たち人間のこころの発達は、生物学的成熟過程に支えられて、未分化な原初的段階から次第に分化と統合へと進んでいく過程（図2）として捉えることができるが、発達障碍、とりわけ対人関係の形成に深刻な問題をもつ人々では加齢を経ても原初的知覚様態に強く依存した状態にあることから、われわれは彼らと関わり合う際に、このような原初的段階での対人世界を大切にした働きかけを心がける必要がある。そのことが可能になって初めて本来の望ましい発達過程が展開していくと思われるのである（小林　二〇〇五）[9]。

〔引用・参考文献〕

(1) 小林隆児　自閉症における「知覚変容現象」の現象学的研究　精神医学　35(8)　八〇四―八一一　一九九三（小林隆児―自閉症の発達精神病理と治療―九五―一一一頁　岩崎学術出版社　一九九九に収載）

(2) 小林隆児　自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚―情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義―　精神医学　36(8)　八二九―八三六　一九九四（同上　一一一―一二九頁に収載）

(3) 小林隆児　自閉症にみられる妄想形成とそのメカニズムについて　児童青年精神医学とその近接領域　36(3)　二〇五―二二二　一九九五（同上　二三〇―二五二頁に収載）

(4) 小林隆児　広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討　精神神経学雑誌　101(8)　一〇四五―一〇六二　二〇〇三

(5) 小林隆児　自閉症とことばの成り立ち―関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界―　ミネルヴァ書房　二〇〇四

(6) 小林隆児　原初的コミュニケーションからみた自閉症のことば　こころの臨床ア・ラ・カルト　23(3)　二七七―二八二　二〇〇四

(7) 小林隆児　広汎性発達障害と創造性―原初的知覚様態と原初的コミュニケーション―　精神科治療学　19(10)　一一八九―一一九五　二〇〇四

(8) 小林隆児　自閉症の三大特徴をどのように理解するか　小林隆児、鯨岡　峻編　自閉症の関係発達臨床　五八―六四頁　日本評論社　二〇〇五

(9) 小林隆児　発達障碍における「発達」について考える　そだちの科学　5　二―八　二〇〇五

(10) 杉山登志郎　自閉症にみられる特異な記憶想起現象―自閉症の time slip 現象―　精神神経学雑誌　96　二八一―二九七　一九九四

（こばやし・りゅうじ　東海大学大学院健康科学研究科教授）